

Title	ボエーム・バヴェルク氏利子論の基礎としての主観的価値
Sub Title	
Author	増井, 幸雄
Publisher	三田学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.1 (1914. 1) ,p.53- 73
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19140100-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

52 に至る三箇月間は合衆國主として供給に當り、十、十一の兩月は露西亞の供給群を抜き、六月に於ては加奈陀の供給に依頼すること多き事實明瞭なりとす。

之を要するに、英國に於ける穀物の供給は合衆國の穀物が三箇月間市場の需要に應じたる後には、アルゼンチーンの供給之に代り、其消耗する以前に於て印度の穀物到者し、十、十一の兩月に至れば、更に露西亞の供給を仰ぐを得るものと云ふ可し。

附言。余は從來我國が食料品自由輸入の主義を實行するの必要を唱道し、之に反する政策を攻撃して今日に至れり。即ち外國米に對する輸入税撤廢の必要の如き、常に余の論述する所なれども、今日に於ては課税の撤廢のみを以て足れりとせず、其撤廢と共に、我國が國策の一として、永く食料品自由輸入の主義を遵守することを中外に宣明するの必要を認めて已まず。蓋し斯の如くにして始めて米の

産出に適する外國の諸地方は我國に於ける米の需要の程度を測量して、適宜産出の範圍を擴張するに至る可ければなり。我國が外國に産出せられたる米の偶々供給過剰と爲れる部分の輸送を受くるの狀態を以てしては、供給の豊富安全共に之を期す可からず。前記「エコノミスト」の論說に據れば、英國は世界到る所の穀物産出地を自國の穀倉とし、交互的に外國並に殖民地をして、自國の穀物を供給せしむるの狀況頗る明白なりとす。而して此事たる、英國が數十年を通じて、食料品自由輸入の主義を實行せるの結果にして、若しも英國の政策半途に變改するが如きことありたらんには、今日英國の爲めに穀物供給の任に當りつゝある地方は決して今日の程度まで穀物收獲の範圍を擴張せざりしや必せり。日本にして外國より食料品の供給を仰ぎ、而して其代價の低廉を期する以上は、米の産出に適する地方をして總て日本の爲めに、之を産出

する地方たらしめ、東洋に大なる米の集散市場の現出するを期せざる可からず。前記の論文は固より不充分の點ありと雖も、英國が海外より穀物の供給を受くるの状況の殆ど理想的境界に達したるを示すに足るものあり。即ち譯載して、讀者の注意を求めんとする所以なり。(堀江歸一)

ボエーム・バヴェルク
氏利子論の基礎として
の主觀的價值

増井幸雄

維也納商工業會議所顧問「ドクトル」オットー・コンラード氏は頃日 Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik. Folge. III., Bl. 46., Heft 3. September 1913. に於て代價決定の基礎となるべき價值と代價よりして定まる價值との區別を論じ、之を基礎としてボエーム・バヴェルク氏の價值算當の理論の支持すべからざること及び此の支持すべからざる算當の理論の上に築かれたる利子論の探るべからざる所以を論じたり。左に主なる部分を抄譯せん。

價值論及代價論の組立に於ける利子問題の地位

批評に入るに先ちて利子問題と價值論及び代價論との關係に就ての私見の一端を述べむ。
價值及代價の成立は既成生産物に對する消費者の主觀的評價に其の源を發するものにして、一方に於て此の主觀的評價は是等の財に對する

需要を決定すると同時に他方に於ては既に國民經濟内に於て生産せられたる財の總量が供給として之に對立す、而して自由競争の完全に行はるゝ限り是等の財は其の生産に費さるべき勞銀と同一の代價を以て諸方面に分配せらるゝものなり。然るに財の代價、從て又勞銀は生産に従事する勞働者の數の多くなるに從て益々低落せざるを得ざるものにして、凡ての勞働者が職業を得たる時に至つて始めて勞銀の低落運動は終熄す。然らば勞銀は一定の分配状態の下に於て財が販路を見出し得るの點に止まらざるを得ざるべし。之によつて見れば即ち需要の總量と既成財の總量とが勞銀の高を決定するものにして、既成財の總量は間接ながらも勞銀額の決定に與かるものなり。而して既に支拂ひたる勞銀は事業監理の勞に對する報償と共に企業家にとつては費用を形くるものにして、此の費用は生産物の代價を以て回収せざるべからざるが故に、勞銀は費用なる衣に包まれて生産物の代價

中に移り行く、而して個々の生産物の代價は——自由競争の完全に行はるゝ限り——費用の高即ち生産に費すべき勞銀の高によつて定まる。

代價の關係に就ての私見は大略右の如し。然らば利子論は此の間にありて如何なる地位を占むべきか。曰く、若し、財は凡ての需要方面に向つて費用の原則の行はるゝ様に分配せらるゝといふこと、換言すれば代價は勞銀の高と一致すといふ前提よりして出發せむか、利子論は仍ち其の存在の餘地を有せざるに至るべし。利子は生産物の代價が勞働の費用を超過するによりてのみ發生す。故に利子論の職分は、畢竟、如何にして生産物の代價が勞働の費用以上に居りて以て代價と費用との間に利子を容るゝの餘地を生ずるや、を説明するにありて存す。

然るに限界效用論者の利子論は全く之と趣を異にす。此の一派の論者は代價成立の説明に費用の原則を援用せざるが故に、所謂價值算當の理論を用ひて生産財の代價をば直接に享樂財の

價值より誘導せざるべからざるものにして、價值は效用によりて定まるといふ價值論の根本思想を生産財に應用し、先づ生産財の價值を定め更に之よりして其の代價を導き出さむとす。故に彼等の利子論の職分は、斯の如くにして定まる所の生産財の代價は之より生ずる生産物の代價よりも小ならざるべからざることを示すに在り、蓋し生産物の代價と生産財の代價との差は即ち利子に外ならざればなり。ポエーム・バヴェ

ルクの利子論論述の方法は、先づ算當の理論を以て補充財の價值を定め、之より生産財の價值に導き、而して生産財の代價を導き出さむとするに在るものにして、其の利子の理論は何故に生産財の代價が生産物の代價より低きかの間に答へざるべからざるものなるが、ポエ氏は即ち其の説明を現在財と將來財との間に於ける價值の差に求め、『現在財と將來財との間に存する自然的の價值の差こそ資本利子の發生を來す根源なれ』將來財たる生産財は現在に於て消費し得

べき享樂財よりも其價值小なり、此の價值の相違は代價の相違に對應す、故に生産財の代價は之より生ずる生産物の代價よりも小なり、と説明したり。

是によつて見ればポエ氏は吾人が先に述べたると反對の方向より利子問題の解決を企てたるものなり。説明すべきものは生産物の代價と費用(即ち生産財の代價)との差に外ならざるが、氏は何故に生産物の代價が費用以上に在るやを問はずして、何故に費用は生産物の代價以下に在るやを問へり、生産物が高く賣れるといふことよりせずして、『反對に生産資料が安く買へるといふことよりして利子の發生を説明せむ』としたり。されど予は氏が生産物と生産財との價值の差よりして利子を説明せむとしたるは全く誤れるものなりと思惟す、其の理由は簡單なり、曰く、生産財の代價の基礎となるべき生産財の第一次的價值なるものは交易經濟には存在せざるを以てなり。此の理を示さむが爲に、價值論

56 にとつて根本的意義を有するにも拘らず效用論の餘り注意する所とならざりし一種の區別、即ち原生的第一次的價值と派生的第二次的價值との區別を次節に示さむ。

二 第一次的價值と第二次的價值

價值が代價に對して自變數の性質を具備せる限り、代價の説明は其の基礎を價值に置かざるべからざること明なり。而して斯の如き第一次的價值、即ち代價に對して自變數にして代價説明の基礎となるべき價值は或る前提の下に於ては享樂財の使用價值に外ならざるなり。然らば此前提とは果して何ぞや。

個々の財に對する需要者の評價は各自の所得に照らし又は他の諸種の代價の如何に顧みて行はるゝものなり。例へば或る需要者が冬服一著を百圓と評價し從て之に對して百圓までは支拂を敢てせむと決心する迄には既に自己の所得の高と其の中に於て他の欲望満足の爲に支出すべき金額とを知り居らざるべからざるものにして、

若し所得高が以前よりも減少するか又は他の欲望満足の爲に支出すべき金額が増加するときは冬服に對する百圓といふ評價は勢ひ低下せざるを得ざるなり。即ち特定財に對する特定の需要は既に特定の所得の分配状態と他の財の代價とを前提となし居れるものにして、從て特定財に對する評價は評價者の所得と他の凡ての代價とが與へられたる場合に於てのみ代價決定の基礎たる自變數と見做し得べきなり。次に人が同時に種々の財に對して需要を實行するの標準たる需要表又は需要の組合せに就て云へば、其は諸代價の關係及び所得の高に從て定めらるゝものなり。何人も所得を費すに當つては一定の分量より出來得る限り多大の欲望満足を得る様に力むるものにして、代價の關係の同一なる間は一定の方法に使用するも代價關係變動するときは消費の方法も亦隨て變動を來すべし。例へば所得三千圓の場合に於てその中四百圓を住宅に、千圓を食物に、千圓を衣服に、百圓を薪炭に、

殘部を其の他に消費するとせば、個々の特定財に對する需要は右の需要組合せに從て實現せらるべきも、若し住宅費が三百圓に減じたりとせば之と豫定額との差一百圓は他の例へば衣服食物薪炭等の欲望満足の増加に向けらるべく、若し又衣服騰貴のために衣服費が豫定額にては不足を告ぐるに至りたりとせば他の部分を切り詰めて此の方面に振り向くべく、その結果何れの場合に於ても他の個々の財に對する需要の變動從て又需要の組合せの變動を來すべきが如し。即ち各々の代價關係に對して各々一定の需要組合せあるものと考ふることを得るものにして、一定の代價關係に於ては需要の組合せも亦一定せるものなり。而して此の需要の組合せが如何に編成せらるゝやは、其の人の所得の與へられたる限り、代價によりて決定せらるゝものにあらずして欲望の状態、天性、生活状態等によりて決定せらるゝものなり。故に吾人は此の需要の組合せなるものを代價に對する一自變數たら

しめむが爲には所得の高を既に與へられたるものと前提せざるべからざるなり。要之、特定財に就ては所得の高と他の代價とを與へられたるものと前提し、又種々の財に就ては所得の高を與へられたるものと前提するときは、消費者の評價は代價に對する一自變數を成せるものと認むることを得べし。然るに翻つて供給の側に就て之を見れば事情全く一變す。予は今日の交易經濟に於ける生産者・商人・労働者等の如き供給者側には、代價に對する一自變數を成し從て代價の成立を説明するの基礎となるべき何等の評價も存在せず、と主張するものなり。其理由果して如何。商品に對する販賣者の評價即ち財に對する供給者の評價は之を三様に考ふることを得。(第一)、販賣者が商品に對して使用價值を認め從て事情によつては之を自己の用に供せむとする場合。此の場合に於ては販賣者は消費者の地位に立てるものにして其の評價は代價に對して自變

性を有するも、而も代價成立の理論にとつては何等實際上の價值を有せず、蓋し販賣者は自己の必要とする分量以上の商品をも有し従て自己の消費額に對しては代價の成立に毫も影響せざる程の最少の評價を附與するに過ぎざればなり。否、予は一步を進めて、此の種の評價は代價論に於ては根本的に無視せざるべからざるものなりと信ず。何となれば生産者が自己の爲に生産する限りは其の經營は自足經濟に屬す、而して自足經濟には代價なるもの存在せざればなり。故に代價論は、何人も他人の爲に生産し従て供給者は其の商品に對して何等の使用價值をも認めざる場合より出立せざるべからざるなり。(第一、一部の論者の云ふが如く、販賣者が消費者の使用價值を察して之を採つて以て自己の評價とする場合。若し其の言の如く販賣者が消費者の評價を採つて以て自己の評價となすことを得とせば、斯る評價は本質上代價に對して獨立なる第一次的の價值ありと云ふを得べきも、交易

經濟に於ては斯の如きことあり得べからざるを如何せむ、何となれば交易經濟社會に於ては享樂財の特定の價值を云々すること能はざればなり。即ち個々の財に對する消費者の評價は人によりてそれ／＼異なるものにして同一財を或者は高く評價し他の者は低く評價す、此の場合生産者は何れの評價を採つて以て自己の評價となさむとするか。又消費者が同時に種々の財を需要するの標準たる需要の組合せは各種の財に對する支出の割合を示すのみにて個々の財に對する評價を示さず、同一の消費者も他の財の代價如何に從て同一の財に對する評價を異にするものなり、供給者は此の中何れの評價を採つて以て自己の評價となさむとするか。畢竟供給者が消費者の評價を標準として自己の評價を有するに至るといふことは不可能事たるを免れざるなり。(第三)商品が代價を獲得し得るが爲に此の點よりして販賣者が商品尊重する場合。此の場合の價值は即ち主觀的交換價值に外ならざる

が、それは享樂財の使用價值と異なりて代價を決定するの原因ならで、却て代價の如何によりて定まるものなり。ボエーム・バヴェルク曰く、財の(主觀的)交換價值は之と交換し得べき財の使用價值によつて定まり従て又其の限界效用によつて定まると。故に交換價值の大小を定むるが爲には財が他の如何なる財の如何なる分量と交換し得べきやを知るの要あり、而して之に答ふるものは代價なり。因是觀是、交換價值は一定の交換状態從て一定の代價を既に與へられたるものと前提し居るものにして代價が説明せられたる後始めて説明せらるべきものなり。故に商人又は生産者の其の商品に對する評價は代價よりして定まる第二次的のものにして代價を決定するの基礎たる第一次的のものにはあらざるなり。要之、供給者の其の財に對する評價、詳しく云へば商人の商品に對し、生産者の生産資料に對し、労働者の労働に對する評價は、皆代價を前提とし代價如何によりて定まるものなるを以て、

之を代價理論の基礎とすること能はざるなり。以上を以て供給者側には代價理論の説明要素たるべき第一次的の評價を發見すること能はざることを示し得たり。即ち使用價值は供給者側に於ては代價に影響するの要素たらず、消費者の評價を採つて以て自己の評價とすることは不能に屬し、而して殘る所の主觀的交換價值は代價によりて定まる所の第二次的のものにして代價の基礎たること能はざるの理を明にし得たり。故に價值の中に代價理論説明の基礎たり得るものは僅かに需要の組合せに關しての消費者の使用價值評定一あるのみ。然るにボエーム・バヴェルクは第一次的なる使用價值と第二次的なる主觀的交換價值との間に於ける根本的の區別を認めずして、均しく兩者を採つて以て代價理論の基礎となしたるものにして、而も主觀的交換價值を代價の説明要素とするに際して當然既に與へられたるものと前提すべき代價をば與へられたるものと前提せざるなり。ボエ氏の利子論

60 中の最も重要な一節は恰も斯る許すべからざる主観的交換価値の利用に基づき居れるものなるの理、以下之を示さむ。

三 ボエ氏の價值論に於ける第二次的價值

ボエム・バヅエルクの價值論中吾人の最も興味を覺ゆるものは所謂算當の理論を含める彼の補充財の價值に關する理論なり。價值算當の理論の職分はボエ氏自らも云へるが如く生産財の價值を説明するに在るものにして、此の價值よりして生産財の代價を生じ、斯して生じたる代價は又財の實際の分配を定むるの準繩となるを以て、補充財の價值の理論及び其の中に包含せらるゝ價值算當の理論は正に缺くべからざるの論理的楔子たるなり。然らば此の算當の理論は果して其の職分を果し得るや否や。

ボエ氏は補充財の價值の理論を展ふるに實例を以てし、相互補充的地位に在るABC三個の財を結合して使用するとにより最少百の效用

ありとせば是等三個の財の價值は百に等しかるべく、而して此の百なる價值はABCの各個に如何に算當せらるゝやといふことを研究したり今之を算當の場合即ち生産財の場合に應用し、假にABCなる三個の財が冬服を作るべき羅紗とミシンと勞働なりと想像せば、冬服といふ生産物の價值百を算當の出發點として、之より生産財たる羅紗ミシン及び勞働の價值が各々幾何なるやを定むることとなるなり。

予はボエ氏のなせる割當の方法に對しては何等の反對をもなさざるべく、其の割當は正しく論せられたるものと假定せむ。然しながら此の説明は事自足經濟に關し、百といふ特定の價值より出發す。今日の交易經濟に就ては如何に應用せらるべきか。甲は冬服を百圓と評價し乙は之を五十圓と評價し丙は之を三十圓と評價するが如く、各人の評價が必ずしも歸一せざる場合には生産者は此の中何れの評價を以て算當の基礎とすべきや、又ミシンの如く反覆數百の生産

物を産出し得る場合には其の生産物に對する評價のそれと異ると同じ回数だけ價值が算當せらるゝにや、氏は此の問題に對しては何等の答ふる所あるなし。尤も交易經濟に關して二三の細論を試むる所ありと雖も、結局交易經濟に於て算當の出發點とすべき一定の單位的の價值は如何にして生ずるやといふ根本的の重要問題に就ては一言も言及する所なきなり。

61 予の信ずる所によれば、交易經濟に於ては生産財に就ても享樂財に就ても斯る算當の基礎となるべき價值は唯々主観的交換價值の一あるのみ。然るに此の主観的交換價值は代價よりして定まる所の第二次的派生的のものなるを以て、豫め代價の如何を知らずしては之を知ることが得ず、先づ生産財の價值を定めて以て其の代價に導くこと能はず。従て享樂財の價值より出發して代價決定の基礎たるべき生産財の第一次的原始的の價值に到達せんとする算當の理論の企ては到底不可能たるを免れず。否此の理論は交

易經濟に於ては生産財の價值の基礎となるべき享樂財の特定の價值なるもの始めより存在せざるものなることを忘れたるの點に於て劈頭より誤れるものと云はざるべからざるなり。

以上、實際社會に於ては確實に生産財に對して評價が與へらるゝも、學理上に於ては完全に算當問題を解決すること能はざるを示せり。思ふに實際社會に於て生産財に與へらるゝ評價は第二次的派生的にして代價によりて定まるものなり。實際の算當問題は價值の算當にあらずして代價の算當なり、生産者は實際に支出したる既知の費用即ち生産資料の代價より遡りて生産物の代價の決定を企つ。然るに算當の理論にとつては生産資料の代價は未知數にして生産物の價值よりして始めて導き得べきのみ即ち理論と實際とは全く異なる職分の前に立てるものにして従て此の異なる職分を同一の方法にて果すこと能はざるは云ふ迄もなき所なり。算當問題は實際が解決し得るものなる以上は理論も亦之

62 を解決し得ざるの道理なし、といふ算當論者の主張は確實を缺くものと云はざるべからず。

四 ボエ氏の代價論

先づ「費用の原則」の篇を見む。

ボエーム・バヴェルクは此の篇に於て生産物の價值と生産財の價值及び代價との間に於ける直接關係を證明せんとしたるものなるが、此の研究は生産物と生産財との兩者の分量を一定したるものと前提する限りに於て成功したるものと見ることを得べし。

思ふに若し種々の財にして相互獨立に生産せられ従て其の代價も亦獨立に成立するものなりとせば、各種生産物の代價も、其の生産に用ひらるゝ生産財の代價も、共に他の代價より獨立して各自直接に消費者の評價と財の分量との兩者よりして定めらるゝことを得べきなり。是に於てかボエ氏は生産物の代價と生産財の代價との關係を研究して之より後者の分量を導き出さんとしたるものにして、即ち曰く「代價成立の因

果關係は生産物の價值及び代價より出發して生産財のそれに到達するものにして、決して逆に後者より前者に到るものにはあらず。即ち鐵製品に對する消費者の主觀的評價が出發點となり、其の貨幣的評價額が鐵製品市場に於て鐵製品の代價を定め此の代價は又鐵の消費者たる生産者の鐵に對する評價（主觀的交換價值）の標準となり、而して最後に此の評價額よりして鐵の市價が定まるなり」と。

然れども此の理論は生産物と生産財との分量を一定したるものと前提したるものにして、苟も其の然る限りは有効に成立すべしと雖も、一度此の前提を撤去せんか全く支持すべからざるに至るを見る。即ち先づ鐵製品の分量を一定ならずとせば、現在の供給狀態に於て定まりたる鐵製品の代價は永續せずして遂に鐵の代價に一致すべく、次に鐵の分量を一定ならずとせば鐵の代價は一定點に止まらずして勞銀と一致すべく、斯くして鐵製品の代價は又更に變動を來

すべきなり。

之によつて見れば享樂財の價值と生産財の代價との間にはボエ氏が右の引用文に於て主張するが如き直接關係は何等實際上存在せざるにあらずや。鐵製品の代價は其の價值によつて定まるにあらずして、寧ろ價值より全く獨立せるものなり。若し代價にして價值より定まるものなりとせば、鐵製品に對する評價が大小異なる場合には其の代價も亦之に従て大小不同にして終に一に歸せざるべきなり。世間又斯の如きの理あるべからず。鐵製品の代價は凡ての場合に於て鐵の代價に従て定まるなり、而して鐵の代價は鐵製品の代價によつて定まらずして勞銀によつて定まるなり。

生産物の價值と生産財の代價との間には直接の關係と間接の關係との二者あり得べし。直接の關係は前述の如く生産財の代價は直接に之より生ずる生産物の價值に従て定まるといふことに存するものにして是れ即ち生産物の價值より

生産財の價值を導き従て其の代價をも導き出さんと欲すること、例へば冬服の價值より之が生産資料たる羅沙ミンシシン及び勞働の價值並に代價を導き出さんとするが如き彼の算當の理論の取扱ふ所の關係なり。然るに間接の關係は財の總量と需要の總量との共同作用によつて、財を販賣せんが爲には勞銀を幾何の程度に止むべきやが定まり、此の勞銀を通じて初めて財の代價が定まるといふことに存す。此の場合には享樂財の價值と代價との間には何等の直接關係なく、直接關係は寧ろ勞銀に關して生じ、此の勞銀よりして始めて代價に到達するなり。此の關係は即ちボエ氏が結局辯護するに至りし所のものにして、氏は右の場合に於て楔子たるの地位に立てる勞銀が一圓なるか三圓なるかは勞働者が一日に産出し得る生産物の價值如何殊に最終の利益最も少き部分の價值如何によつて定まると。是れ最後の勞働者の生産力によりて他の凡ての勞働者の勞銀が定まるといふ所謂限界生産力の

思想に外ならざるも、其の眞意は財の供給の總量と需要の總量とによつて最終労働者の勞銀、從て又他の凡ての労働者の勞銀が定まり、斯くして始めて財は販路を見出すといふ勞銀の原則を明に示すの一事にあり。即ちボエ氏は結局此の限界勞銀の法則に到達したるなり。

限界勞銀の法則は享樂財の價值と代價との間に間接の關係ありとなし、算當の理論は其の間に直接の關係ありとなす、ボエ氏が結局到達する『需要總量と供給總量——勞銀』なる關係の外に、『鐵製品の價值——鐵製品の代價』及び『鐵製品の價值——鐵の代價』なる關係は果して實際に成立するや否や。氏は此の問題を肯定せんとするならんもそは誤れり。蓋し既に前にも述べたるが加く此の直接關係は鐵に關聯しての鐵製品の分量の與へられたる場合に於てのみ成立するものにして、鐵製品の分量の與へられざる場合に於ては其の代價は之に對する評價によつて定まらずして鐵の代價によつて定まり、而

して鐵の分量の與へられざる場合に於ては鐵の代價は鐵製品に對する需要によつて定まらずして他の凡ての原料品の代價と同じく勞銀額によつて定まるものなればなり。故に享樂財の價值と代價との間には限界勞銀の法則によつて生ずる間接關係の存する外、又算當の理論の立せんとする直接關係の成立する餘地なきなり。

然りと雖も限界勞銀の法則は單に代價の基本的要素たる勞銀が如何にして定まるやを示すのみにして、如何にして代價が勞銀によつて定まるやを説明するものにあらず、費用の原則を援用し來るに於て始めて此の問題は説明せらるべし。而も一方に於て費用の原則それ自身は、代價が勞銀によつて定まることは説明するも其の基礎たる勞銀が如何にして定まるやを説明せざるを以て、之を以て代價の成立を説明するの獨立的要素と認むること能はず、必ずや補助として勞銀の法則を援用することを要するなり。此の事は限界效用論者も明に認め居る所なるが、彼

等は限界勞銀の法則を論じて此の費用の原則の必要とする支柱を提供しながら、而も自ら之を覺らず、限界勞銀の法則によりて勞銀は與へられたるものと見るを得べきが故に、費用の原則は再び代價の原則として用ひ得るに至りしものなるにも係らず、彼等は之を看過したり。代價の關係を了解せむが爲には費用の原則と限界勞銀の法則とを連結するより必要なるはなし。即ち既に第一節に述べたるが如く、需要の總量と財の總量とによりて勞銀が定まり、(限界勞銀の法則)而して此の勞銀よりして個々の財の代價が定まる(費用の原則)なり。

是によつて見れば費用の原則に關するボエ氏の見解は結局吾人が第一節に於て代價の關係に就て述べたる所と全然一致するものなりと云はざるべからず。蓋し若し氏にして鐵製品に對する需要といふが如き個々の需要方面より出發して歩一步觀察の歩を進むる代りに最初より國民經濟の全般を眼中に置いて論究したりせば、財

の需要の總量と供給の總量との關係は直ちに勞銀に導くことを認めざるを得ざりしなるべく、從て氏も亦勞銀よりして代價を決定するには更に一の部分的説明を要し、其の説明は費用の原則に依らざるを得ざるの場合に立至りしなるべきを以てなり。何れにしても氏の意見と吾人の意見とは根本的に異なる者にはあらず、唯吾人は費用の原則を重視するに反し氏は單に此の原則が氏の所説と矛盾するものにあらずと云ふを以て満足したるの點に於て異なる所あるのみ。思ふに代價に到達せむが爲には費用の原則及び算當の理論なる二個の補助資料の中何れか一方を要するものなるを以て、後者を棄てむか即ち前者は必要缺くべからざるものとなる。限界效用論者は算當の理論に執著して費用の原則を輕視するも、一度費用の原則にして支持せらるるに至らば算當の理論は不用に歸せむ。吾人は前節に於て算當の理論が其の職分を盡すこと能はざるを立證したるが、茲には其の職分を盡す

を要せざることを示し得たりと信ず。

以上述べ來りたるボエ氏の「費用の原則」の篇は實際の代價論即ち代價に關する諸關係を敘述したるものなるが、氏自らが代價「成立の根本原則」として述ぶる所の法則は却て其の重要な度に於て遙かに前者に劣れるを見る、何となればそれは單に個々の孤立せる財の代價の成立を説明するのみ、從て他の凡ての財の代價を以て既に與へられたりとなす前提の下に於てのみ通用し得べきものにして、其の云ふが如く「根本的」なるものにはあらざるを以てなり。

斯く云はゞ氏は之を争はむとするならむも、容易に其の然る所以を示さむ。氏は馬の賣買の例に於て限界賣買者の法則を述べ「代價は限界賣買者の評價の平準によりて定まる」となせしが、然らば其の代價の高低は如何にして定まるやに就ては、因果關係に於て遙に後方に位する事情即ち貨幣の價值を以て其の決定原因なりと

なせり。然るに貨幣の價值は其の交換力如何、從て代價の状態如何によつて定まる所の派生的第二次的の交換價值にして、代價廉なれば交換力大に、從て又貨幣の主觀的價值大なれども、代價高ければ交換力小に、從て貨幣の主觀的價值も亦小となる。故に限界賣買者の評價如何は結局物價の状態如何によつて定まるものにして、他の凡ての財の代價の與へられたる場合に於てのみ此の評價は始めて與へられたるものと見るとを得べきなり。即ち知る、氏の所謂代價成立の根本原則なるものは他の凡ての財の代價を與へられたるものと前提するものにして、斯る前提の下に於て循環的に各々の財の代價を説明するは決して代價の成立を根本的に説明する所以にあらず。これボエ氏の所謂根本的の原則は何等根本的の原則にはあらずと云ひし所以なり。

完全なる代價の原則は諸代價の關係、詳しく云へば個々の需要方面に於て需要と供給とが一致するも猶一定不動の代價を生せざることを説

明するものならざるべからず。不動の代價を現出せしむるが爲めに、凡ての方面に於ける需要供給が同時に一致すること及び猶其の上に各財の代價が其の生産の費用と一致することの兩條件を必要とす。即ち各々の財は費用代價を以て需要せらるゝ分量だけ供給せられざるべからざるものにして、斯くして始めて何れの生産業に於ても擴張も緊縮も行はれず、以て平均状態に達すべきなり。然るにボエ氏の限界賣買者の法則として現はるゝ所謂代價成立の根本原則なるものは右の平均の條件の一たる需要供給の一致、而も個々の財の種類に就ての需要供給の一致のみを見て第二の條件たる費用と代價との一致を全く顧みざる部分的のものにして、個々の財の種類に對する一時的の代價状態を定むるには適するも、平均を來すが如き物價状態を説明すること能はざるなり。

斯くの如くなるを以て、ボエ氏の費用の原則の節に先だつ代價論の一節は吾人にとつては何

等の興味なしと雖も、其の結論は利子の理論に重大なる關係あるを以て之を見通すこと能はず氏は結論して曰く、代價は「徹頭徹尾主觀的評價の産物なり」市場に於て相反對せる商品及び代價物件に對する評價の結果として生ずるものなり」と。此の結論は馬の賣買の例より導けるものなるが、氏は同所に於て需要の方面に於ても供給の方面に於ても共に多數の評價を拉し來り之よりして代價を導くを以て、當然代價は市場に於て相反對する評價の結果なりとの結論に到達せざるを得ざる次第なるが、前にも述べたるが如く交易經濟に於ては商品は販賣者にとつては何等の價值なく從て供給の側に於ては價值は代價決定の要素たらざるを以て右の如き説明法は事實に適合せず。事實に忠ならむとせば宜しく賣手の側の評價を零とすべきものにして、斯くするに於ては供給の側に於て代價の決定要素たるべきものは僅かに所有者が出來得る限り有利に賣らむと欲する財の分量あるのみ。然ら

ば即ち何等市場に於て相反對せる評價なるもの存在せず、從て又代價は斯る評價の結果として生ずるものにあらずして、市場に現はるゝ需要と出來得る限り有利なる販路を求むる財の分量との共同作用によりて生ずるものなり。供給の側に放ける代價成立の第一次的要素が財の分量にして決して財に對する評價にあらざることは代價は財の需要供給の平均するの點に定まるといふ所謂需要供給の法則中に最もよく表はれ居る所にして、予は事實上の決定要素たる財の分量を全然輕視する限界賣買者の法則に於て需要供給の法則以上に何等の進歩あるを認むる能はざるなり。

ボエ氏が代價は市場に於て相反對せる幾多の評價の結果として生ずるものなりとの見解を頑守する所以は思ふに此の見解が氏の利子論にとつて缺くべからざるものなるが爲にして、代價は主觀的評價の結果として生ずるものなるが故に價值大なれば代價も亦高からざるを得ずとの

思想は、吾人が屢ボ氏の利子論に於て發見する所なり。若しも代價にして氏の云ふが如く評價の結果として生ずるものなりとせば價值と代價との間に右の如き關係を認むることを得べしと雖も、事實は然らずして、代價は評價と費用代價にて需要せらるゝ財の分量との共同作用によりて生ずるなり。さればこそ、高く評價せらるる財の代價の頗る低きことあり、又一般に低く評價せられ僅かに二三の人より高く評價せらるる財の代價の頗る高きことあるなれ。財に對して與へらるゝ評價の多少大小如何は代價の高低に對しては全く風馬牛たり、決定方を有するものは費用のみ。故に評價の高より遡つて代價の高低を説明すること能はざるなり。

五 ボエ氏の利子論に於ける

第二次的價值

ボエーム・バヴェルク氏の利子説明の方法を簡單に云へば『現在財は將來財よりも大なる價值を有す。主觀的評價の結果として生ずるもの

次的の價值の謂なるやと。

が客觀的交換價值を定むるが故に、現在財の代價は將來財の代價よりも大なり。生産財は悉く……將來財なるが故に、其の價值も、從て又代價も、共に之より產出せらるゝ生産物の價值及び代價よりも小なり。即ち生産財は之より生ずる生産物販賣代價よりも低廉なる代價を以て購入するとを得るなり。生産財が享樂財に變ずるにつれて漸次完全なる現在財となり、從て茲に價值の増加を見る。此の價值の増加が即ち利子なり。故に現在財と將來財との間に存する自然的の價值の差こそ凡ての資本利子の發生する根源たるなり』と云ふにあり。見るべし、氏の此の説明に於て生産財の價值、明に供給の側にのみ現はれ得べき價值が主要なる役目を演じ居れることを。是に於てか吾人は問はざるを得ず、其の所謂價值とは如何なる價值ぞや、生産財と享樂財との代價の相違を説明するの基礎たるべき原生的第一次的の價值の謂なるや、或は既に生産財の一定の代價を前提となせる派生的第二

今ボエ氏の云ふ所を見るに、曰く『生産財も他の財と同じく吾人の或る欲望満足が一に繋つて或る効用を得ると否とに存することを認識したる時に於てのみ吾人に對して價值を有す、而して或る財に依頼する欲望満足が重要なものなるときは價值大に、重要ならざるときは價值小なり』と。之によつて見るも、氏が自己の需要の爲にする生産を前提となせるものなること明なる所にして、氏は常に生産者が既成財に對して認むる價值より出立して生産財の價值を導き出さむとはするなり。如何にも自己生産に於ては生産財の第一次的價值を認むるを得べし。されど交易經濟に於ては市場の爲に生産するものなるが故に生産者は生産物に對して何等の使用價值をも認めず從て又生産財に對しては何等の使用價值をも認むることなし、即ち生産者は生産財に對して一定の積極的價值を認むるものにはあらざるなり。さればとて此の積極的價值は

既成享樂財に對する消費者の評價より導き出すことを得ず、蓋し消費者は同一の財を種々に評價するが故に斯る誘導の基礎となるべき（生産物の）單位的價值なきを以てなり。茲に於てかボエ氏の所謂價值評定なるものは生産者の使用價值にもあらず、消費者の誘導的使用價值にもあらずして實に交換價值の評定たらざるを得ず。然るに交換價值は派生的第二次的なるが故に此の場合に價值と稱するは即ち派生的價值に外ならざるなり。

因是觀是、生産物と生産財との價值の差は代價の原因にあらずして其の結果なり。現在財となるべき生産財の價值の増加に伴つて利子が發生するにあらずして、逆に生産財が享樂財となるに際して利子發生の爲に代價の増加を來すの結果として價值の増加を來すなり。然るにボエ氏は利子を説明するに享樂財と生産財との間に於ける價值の差を以てせむとす。是れ價值の差と利子との間に於ける因果關係を逆に立せむと

するものにして、結果を以て原因となし而して原因を以て結果とするものに外ならず、享樂財を生産財よりも高く評價するが故に利子が發生するにはあらず、利子があるが故に享樂財の（交換）價值が生産財の價值よりも大となるなり。價值の差は利子に對して何等決定力を有する第一次的の現象にあらず、利子によりて生ずる代價の差の第二次的結果のみ。

故に結論して曰く、利子は現在財と將來財との價值の差よりして之を説明することを得ず、生産物と生産財との價值の差は既に兩者間の代價の差を前提し従て又利子を前提せる第二次的派生的の價值の差なるを以て利子説明の要素たること能はず、故に現在財と將來財との價值の差は『凡ての資本利子の發生を來す根源』にはあらざるなり。

六 總括論

以上論述したる所よりして之を見れば、吾人はボエーム、バヴェルクの利子論に有利なる判

決を下すことを得ず、利子論に於て説明すべきものは生産物の代價と生産財の代價との差、即ち生産物の代價が費用を超過するその超過額に外ならざるに、ボエ氏は何故に生産物の代價が生産財の代價よりも大なるやを研究せずして、逆に何故に生産財の代價は生産物の代價よりも小なるやを説明せむとし、生産物が高く賣れるの理由を求めずして却て生産財が安く買はれるの理由を求めたり。即ち費用によつて定まる所の生産財の代價といふ既知のものより出發して生産物の代價といふ未知のものに向つて進むの策を探らずして、逆に、既に利子を含める高さ生産物の代價といふ未知のものより出發して之より生産財代價を導き出さむとす。故に氏の研究は始めより逆の方向を探れるなり。而して此研究経路の逆進は利子の理論にも現はれ居る所にして、將に説明せむとする代價の結果として發生する第二次派生的の價值に重大なる役目を演せしめ、利子ありて始めて生ずる價值の差よ

りして利子を導き出し、利子の中に價值増加の果實を認めたり。然るに實際に於て此の價值の増加は利子の増加によりて生じたる代價増加の結果に外ならざるなり。然らば如何にしてボエ氏は斯る誤れる路を歩みしか。曰く、氏は限界效用論者の價值論及び代價論を通じて、費用の原則の助けを藉ることを蔑視し、而して代價成立に關する凡ての現象を價值評定よりして説明せむとしたるによる。勿論正統學派の云ふが如き費用の原則は不充分なりと雖も、今や費用の原則は限界勞銀の決定によりて需要の側より説明せられ支持せらるゝに至りしにも拘らず、氏は全然之を顧みずして生産物の價值と生産財の價值との間に於ける直接關係を立せむと力めたり。人若し費用の原則を棄てむか仍ち斯る直接關係は成立せざるを得ず、斯くして「算當」によりて生産物の價值より生産財の價值を誘導し得と信する彼の不幸なる理論は成り立つなれ。然れども實際に於て生産

物の代價と生産財の價值及び代價との間には彼の直接關係の成立せざるを奈何せむ。需要と供給との關係は財の總量なる觀念を経て遂に勞銀に到達するあるのみ。勞銀より代價の成立することは別に説明を要す。而して此は唯費用の原則のみ能くし得る所なり。故に此の點に就ては效用論者も亦正統學派の費用論者と同じく誤れるものにして、費用論者は供給の側に存する關係のみに注意し、效用論者は需要の側に存する關係のみに偏したり。若し正しき路を行かむとせば、是等の需要の側に存する關係と供給の側に存する關係との兩者を併せ探りて以て之を結合せざるべからず。換言すれば限界勞銀の法則と費用の原則とを結び付けざるべからず。財の總量と需要の總量との關係よりして勞銀の高が定まり、此の勞銀よりして個々の財の代價生ずる。生産物の價值と生産財の價值との間に生ずる因果關係に於て、兩者の中果して何れが原因にして何れが結果なるやの問題に就ては、効用論

者は前者を以て原因なりとなし、費用論者は後者を以て原因なりとなし、兩派の論客が全力を盡して相争ひしにも拘らず未だ満足なる解決を得るに至らずと雖も、吾人の説を以てすれば此の論争を調停することを得べし。吾人の見地よりすれば、原生的第一次的の價值を論ずる限りは斯る問題は起り得ず、蓋し交易經濟に於ては生産財の原生的價值なるもの存在せざるを以てなり。故に生産財の價值として吾人の觀察に入り來るものは唯々交換價值あるのみなるが、此の交換價值は派生的にして代價によりて定まるものなり、故に生産物の價值と生産財の價值との間に一の關係を立せむとせば、吾人は代價を楔子とせざるべからざるものにして、乃ち「生産物の價值——生産物の代價——生産財の代價——生産財の價值」なる因果の連鎖を得るも、此の因果關係は果して上述の順に成立するものなるや、或は逆に生産財の價值より始まりて結局生産の價值に到達するものなるや。此の問題

は明に兩中間項たる代價の因果關係如何に係る。果して生産物の代價が生産財の代價より生ずるにや、或は逆に後者が前者より生ずるにや。思ふに財が代價を得るのは二個の條件を具ふるを要す、財が有用性を有し従て需要せらるること及び比較的稀少なること、即ち是なり。生産財の有用性は生産物より來り、生産物の稀少性は生産財より來るものにして、生産物の代價の存在が生産財の稀少如何に係ると同じく、生産財の代價の存在は生産物有用性如何に係る。生産物の代價が生産財の代價より導かるゝとか、又は逆に、生産財の代價が生産物の代價より定まるとか云ふと能はずして、寧ろ代價の成立に際しては、一方に於ては生産物より下つて生産財に至り、他方に於ては生産財より上つて生産物に至る所の二個の相異なる關係の作用するものありと云ふべきなり。此の關係は又代價の理論に顯はれ來らざるを得ず、吾人の代價説明の場合は即ち然り。即ち需要より下つて勞銀に至り

而して勞銀より上つて代價に至る。一部は限界勞銀の法則之を説明し、他は費用の原則之を説明す。兩法則何れも唯一個のみにては代價形成に對して満足なる説明を與ふると能はざるなり。ボエーム・バグエルクは資本利子の説明のため眞に偉大なる思想を建設したれども、其の基礎堅實ならずして批評の風に堪え得ざるは惜むべきなり。(完)